

いま そのとき 明日へ

被災地の障害者・関係者の声から

僕はひとりぼっちじゃない

全障研宮城支部長（仙台市若林区） 鷲見俊雄

●部屋の壁に亀裂が入ってきて

三月一日金曜日、雪がちらつく寒い日でした。僕の住んでいる所は、築三〇年くらい経過した鉄筋コンクリート一〇階建ての二階です。僕は起床・就寝時の身体介護と週四回の家事援助を受けながら一人暮らしをしています。その日は家にいてお昼の家事援助を終え、出かける準備をしているところでした。そして一四時四六分ころ、突然強い揺れを感じたのです。最近地震が続いていたので最初のうちは、また来たかという感じでいたのですが、なかなか揺れが収まらず、逆にだんだん激しく、これまでに感じたことのない強い揺れが襲ってきました。部屋は強烈に揺れ、壁にどんどん亀裂が入っていくのを目撃したときには心底ヤバイと感じました。最初の揺れが収まったところに、全障研全国事務局の新井田さんから「東京もかなり揺れたけど仙台はだ

いじょうぶ？」と電話をもらい、話している最中に余震が来て、停電になってしまったのです。大体一五時くらいだったと思います。それからは携帯電話もメールもつながりにくくなり、停電でそれ以降の情報はまったく入ってきませんでした。同じ建物に住んでいる方がようすを見に来てくれて散らかっていた部屋を車椅子で通りやすくしてくださったこと、行きつけの店（うたごえ喫茶「バラライカ」です）の方がおにぎりや懐中電灯を差し入れに来てくれたことがありがたかったです。

その夜は普段なら就寝介助に来るヘルパーさんも来訪できず、何回となく起こる余震に怯えながら、寒さに震え、夜が明けるのを待つしかありませんでした。

●取り残された？

朝を迎え安否確認に来てくれたヘルパーさんから、僕の住んでいるところは、倒壊

のおそれがあるので避難命令が出ていることを知らされびっくり仰天。初めて「取り残された」ことを知ったのです。ヘルパーさんをお願いして避難所までつれていってほしい、とりあえず倒壊の恐れがあるところから脱出できました。もし火災でも起きていたらと思うとぞっとします。

ホッとしたのもつかの間、連れてきてもらったヘルパーさんは次のところに行かな

▲二〇一〇年の全障研東北ブロック集会の場りに訪れた宮澤賢治記念館で



●妹の家から弟の家へ そしてわが家に戻るはずが

その後、妹夫婦が迎えに来てくれたので避難所での滞在はわずかで済みしました。妹夫婦の家も津波警報で避難していて、翌朝僕のところに来てくれたのです。そこは停電だけでしたが、余震による津波が心配ですぐに避難できるような服装でいました。余震と津波に怯える日が続きしました。そういう状態を心配してくれた弟の家に、妹家族とともに避難しました。避難先での僕の

介助は一緒に行った甥っ子が主にやってく

れたので、何不自由なく避難生活を送ることができました。きょうだい家族で僕を支えてくれて本当に助かりました。

倒壊の恐れがあった僕の家は、その心配はなくなって、ひと安心。あとはライフラインが復旧をするのを待つのみ、と思っていた矢先の四月七日午後一時三二分に震度六強の強い余震が発生し、せっかく回復しかけていたライフラインも、まだ被害を受け、水道・ガス・電気が利用できない人たちが増えてしまいました。せめてもの救いは津波の被害がなかったことです。いつまでこういった不安極まりない状態が続くのでしょうか？ そんなどうしようもない不安な気持ちを抱きながら、目いっぱい気持ちで日々を送っている方々が健常者・障害者を問わずたくさんいます。その人たちへの物心両面からのサポートはいくらでもあります。特に「自分はひとりぼっち」という気持ちにさせない取り組みが必要だと強く感じています。

●普通の生活と笑顔を取り戻すために

今回の大震災で、僕が関わっているきよ